博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	越智雄磨
論　文　題　目	「ノン・ダンス」という概念を巡って ー1990 年代以降のフランス現代舞踊の展開に関する一考察ー

審査要旨

本博士学位請求論文は、しばしば「ノン・ダンス」と称される、近年のフランス現代ダンスにおいて顕著に見られる傾向を取り上げ、その特徴を多面的に明らかにするものである。「ノン・ダンス」とは、「踊らないダンス」と言い換えることもできるもので、多分に反美学的、反舞踊的であり、コンセプチュアルである側面を備えた現代ダンスの諸傾向を指すものであり、本論文はそうした舞踊美学が 1990 年代のフランスにおいて生じた過程およびその特徴を、舞踊史学、文化政策学、美学・理論などの見地から多面的に捉え直そうとする試みである。

本論文の構成は以下の通りである。

まず序章において、「ノン・ダンス」という用語の歴史を振り返るとともに、概念的検討を加える。この用語は、『ル・モンド』紙の記者ドミニク・フレタールによって、まずはジャーナリズムの文脈で用いられるようになった、いささか厳密さを欠く用語であることから、また一部の振付家がこの用語に対して激しい反発を見せていることから、慎重な検討がなされる。

第 1 章では、1980 年代に興り、とりわけ当初は「ヌーヴェル・ダンス」としばしば称されたフランス現代ダンスと、1990 年代半ばから見られるようになった「ノン・ダンス」との美学的な相違、とりわけ舞踊的なイリュージョンに関しての差異、さらに 1980 年代に築かれた現代ダンスの諸制度（全国に整備された国立振付センターや公的助成制度）との距離に関する差異が論じられる。

第 2 章では、さらに文化政策の見地から踏み込んで、ノン・ダンスの振付家・ダンサーが多く加わり総勢 50 名ほどにまで達した「8 月 20 日の署名者たち」の活動を取り上げ、1980 年代のフランソワ・ミッテラン大統領、ジャック・ラング文化大臣のもとで、（バレエに対する支援とは区別される）積極的な現代ダンスの支援政策がとられてきたことが、ノン・ダンスの成立に与えた影響が論じられる。1980 年代に現代ダンスの創造・普及を取り巻く環境は飛躍的に改善したが、その果実は必ずしも公平に配分されていたわけではなく、「8 月 20 日の署名者たち」は、既存の制度を批判するとともに、より公平な配分を求めて、文化省に対して働きかけを強め、その要求を部分的に実現していった。

第 3 章では、クワテュオール・アルブレヒト・クヌストという振付家やダンサーらの集団の活動を媒介項として、1960〜70 年代のニューヨークを中心に展開されたポストモダン・ダンスと 1990 年代以降のノン・ダンスとの関係、とりわけイリュージョン、スペクタクル性、技巧重視の徹底した否定などの共通項が論じられる。クワテュオール・アルブレヒト・クヌストは、舞踊史に残る歴史的な作品を定期的に再演したが、中でも 1970 年に初演され、1996 年にフランスでクワテュオールによって再演された、イヴォンヌ・レイナーの『コンティニュアス・プロジェクト　オルタード・デイリー』が取り上げられ、再演の意義と影響が論じられる。

第 4 章では、フレデリック・プイヨードがノン・ダンスを「パフォーマンスの反省的作業」として捉え、その特徴（生産＝制作の様態と集団性の変化、ダンスないしスペクタクルとしてのメディウムに対する反省）を論じた議論を援用しつつ、パフォーマンスの見地から見たノン・ダンスの特徴が論じられる。

氏名　越智雄磨

第5章では、ロラン・バルトの「作者の死」、ニコラ・ブリオーの『関係性の美学』、ジャック・ランシエールの『解放された観客』などを援用しつつ、ジェローム・ベルとグザヴィエ・ル・ロワという2名の代表的振付家、およびその代表的作品『ザ・ショウ・マスト・ゴー・オン』と『ロウ・ピーシーズ』を取り上げて分析し、そこに見られる作者性の問題化と観客性の変化の意義が論じられる。1980年代のヌーヴェル・ダンス（ときに「作者のダンス」とも呼ばれた）が確立した作者性をノン・ダンスは問い直し、それとともに観客の位置づけも問い直されることになる。

公開審査会においては、綴りの間違いや表記の不統一などの細かな不備が論文に数多く見られること、章ごとに議論の重複が見られ、一部の註まで重複していること、その反面、例の取り上げ方に偏りがあること、特に、「ノン・ダンス」を論じるのにジェローム・ベルとグザヴィエ・ル・ロワの2人の振付家の2作品の分析（第5章）によるのでは不充分であることなど、論文の根幹に関わる厳しい指摘も複数の審査委員からなされた。同時に、そのように不充分な部分を抱えてはいるものの、1990年代以降のフランス現代ダンスに関する意欲的、包括的な研究は日本では本論文のほかには例がなく、本論文は舞踊研究において今後、参照されるべき重要な先行研究となると考えられ、博士学位を授与するにふさわしい論文であると審査委員は全員一致して判断するに至った。

公開審査会開催日	2018年9月29日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	藤井　慎太郎	演劇学	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	小沼　純一	音楽文化論	
審査委員	早稲田大学文学学術院・客員教授	鈴木　晶	舞踊学	
審査委員	東京大学大学院総合文化研究科・教授	ドゥ・ヴォス　パトリック	表象文化論	
審査委員	埼玉大学大学院人文社会科学研究科・教授	外山　紀久子	美学	博士（東京大学）